

マルコによる福音書13章 「コロナ禍に見る終わりのしるし」

1A 崩れ去る栄華 1-2

2A 世の終わり 3-31

1B 産みの苦しみ 3-8

2B 迫害と宣教 9-13

3B 大患難 14-23

4B 天変地異 24-27

5B 来臨の徴 28-31

3A 分からない「その日、その時」 32-37

本文

明けまして、おめでとうございます。私たちが本日見ていきたい箇所は、マルコ13章です。自分のパソコンを調べると、去年の元旦礼拝でも、この箇所を取り扱ったようです。聖書箇所は変わりませんが、去年一年に起こったことを省みながら、私たちのキリスト者としての視点をしっかり保ちたいと願います。パウロは、時を知ることを勧めています。「ロマ 13:11 さらにあなたがたは、今がどのような時であるか知っています。あなたがたが眠りからさめるべき時刻が、もう来ているのです。私たちが信じたときよりも、今は救いをもっと私たちに近づいているのですから。」今、私たちが生きている時が、どのようなものなのか？を知る必要があります。そして、主の救いが、いかに近づいているかを知っていきたいと思います。

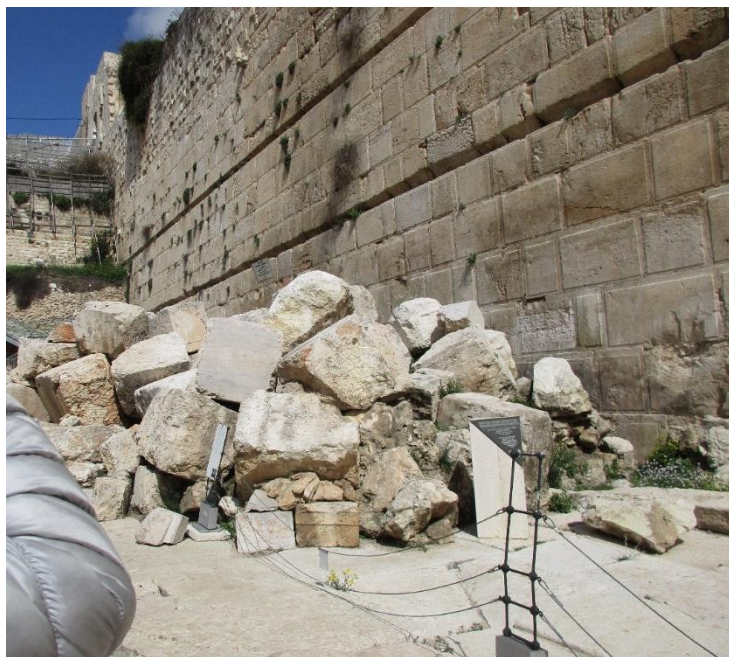
1A 崩れ去る栄華 1-2

1 イエスが宮から出て行かれるとき、弟子の一人がイエスに言った。「先生、ご覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。」2 すると、イエスは彼に言われた。「この大きな建物を見ているのですか。ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」

イエス様が、エルサレムに入城されてから数日経っています。イエス様の一行は神殿の



敷地に入り、そこで教えられ、そしてそこから出て行って、ベタニアで宿泊されるということを繰り返しておられました。そこで、宮を出て行かれる時に弟子たちが、神殿の石や建物のすばらしさに驚嘆していました。けれども、イエス様は何と、「どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」と答えられるのです。この場面は紀元後約 30 年と考えられますが、その 40 年後、紀元 70 年に、ローマ軍によって文字通り、そのことが実現しました。



写真で見ると、神殿は世界の七不思議に入ってもおかしくないほどの荘厳さを持っていました。それが、まさか石が積み残されたまま残ることがないとイエス様が言われて、信じられるでしょうか？しかし事実、起こりました。もう一つの写真は、今の神殿の跡です。イスラエルのユダヤ人は、石が投げ落とされて、また火事で黒焦げになって積み残している石をそのまま残しています。

2A 世の終わり 3-31

1B 産みの苦しみ 3-8

3 イエスがオリーブ山で宮に向かって座っておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにイエスに尋ねた。4 「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのですか。また、それらがすべて終わりに近づくときのしるしは、どのようなものですか。」

彼らがなぜ、神殿の破壊の予告によって、終わりの近づいていると考えたのか？そしてゼカリヤ書 14 章には、エルサレムが国々によって攻められてから、そして主が来られることが預言されています。「14:1-3 見よ、【主】の日が来る。あなたから奪われた戦利品が、あなたのただ中で分配される。「わたしはすべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。都は取られ、家々は略奪され、女たちは犯される。都の半分は捕囚となって出て行く。しかし、残りの民は都から絶ち滅ぼされない。」【主】が出て行かれる。決戦の日には戦うように、それらの国々と戦われる。」そして次の節には、主がオリーブ山に立たれるということが書かれています。このことを弟子たちは考えていたのだと思います。今、主が神殿に向って座っておられて、石が積み上げられたまま残ることはないと宣言されたのは、エルサレムが国々によって攻められるが、ご自身がここオリーブ山に戻って来られることを思って語られたのだろう、と思ったのでしょう。

しかし、普通の感覚でも、これだけ永続するようなものがもの見事に破壊されてしまうのであれば、それは神の力強い訪れであり、世の終わりなのだと思うのではないのでしょうか？これまで永続していくと当たり前のように思っていることが、破壊されていくのが今の時代です。それは、まさしく世の終わりのしるしであり、また主の再臨が近づいていることを教えているのです。

5 それで、イエスは彼らに話し始められた。「人に惑わされないように気をつけなさい。6 わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『私こそ、その者だ』と言って、多くの人を惑わします。

イエス様が語られていることで、弟子たちに言われたのは、「惑わしが多くなる」ということでもあります。惑わしとは何か？と言いますと、ここで「わたしの名を名乗る者が大勢現れ」る、ということ、イエス様は挙げておられますね。これはもちろん、統一協会の文鮮明とか、摂理の鄭明析とか、自らをメシアだと言っているという惑わしではありますが、そもそも、なぜ彼らが救世主としてあがめられるのか？ということが大事です。救いを必要としているという思いは大切ではありますが、それが、まことの救い主キリストの十字架ではないところにある救いを求めているということです。キリストの十字架は、私たちに罪があることをはっきりと示します。そして罪があるから、そこからの癒しと救いがあるこそ、イエスがキリスト、まことの救い主であるのです。そして、罪と死に打ち勝つために、三日目によみがえられました。

今の惑わしとして、まさにコロナ禍があるでしょう。全国の新型コロナによる死者数は、三日前に、過去最多の 450 人です。今、行動制限している人々がどれだけいるのでしょうか？去年の 1 月は、死者数は一日に 100 人でした。その時は戦々恐々としていました。これは何を物語っているのか？人々は、冷静に、客観的に動いていないということです。どこかで煽られている、ということです。そもそも、過去三年間で死亡した人々よりも、自殺者のほうが多いのです。過去三年間で、約 6 万人が死んでいるのです！

私たちは恐れに駆られると、キリストとは別のところに救いを求めます。自分たちを守るために、いつもとは違う行動に出ます。その中で、本当に大事なことまで捨てて、行動に移すのです。そうです、不確実なもののために、確実なものを捨て去ってしまうのです。当然ながら、生活のバランスが崩れます。自分を救おうとして、そのいのちまでを失うことが出てくるのです。

靈的にもそうでしょう。キリスト者たちの間で、どれだけ友を失ったことでしょうか？交わりが希薄になり、その中でそれぞれが試みを受けて、健全な教えや信仰から離れていきます。靈的に必ずしなければいけないことをし続けることによって、私たちは行きます。祈ります、みことばを読みます。そして集まることを怠りません。福音を伝えます。私たちが食事をして、運動をして、睡眠をとるといふごく基本的なことをどこかでやめたら、免疫が下がって病気になりやすくなります。靈的にも、靈的に基本的なことをやめたら、当たり前のようにおかしくなっていくのです。キリストとその十

字架以外のところに、救いを求めていくようになります。どうか、自己点検してみてください。統一協会や摂理のような異端カルトに走っていないくとも、イエス様以外のところに偽物の救いを求めているのであれば、同じことです。

7 また、戦争や戦争のうわさを聞いても、うろたえてはいけません。そういうことは必ず起こりますが、まだ終わりではありません。8 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、あちこちで地震があり、飢饉も起こるからです。これらのことは産みの苦しみの始まりです。

戦争というのは、これまでも歴史を通じて起こっていました。これらは必ず起こると、イエス様が言われた通りです。けれども 8 節を見てください、「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり」とありますね。これは旧約聖書に出てくる言い回しで、全面的な戦争です。地域戦争に収まらず、世界戦争になっていくというような意味合いがあります。したがって、私たちはすでに、産みの苦しみの始まりというものを経験しています。前世紀に世界大戦を経験しています。

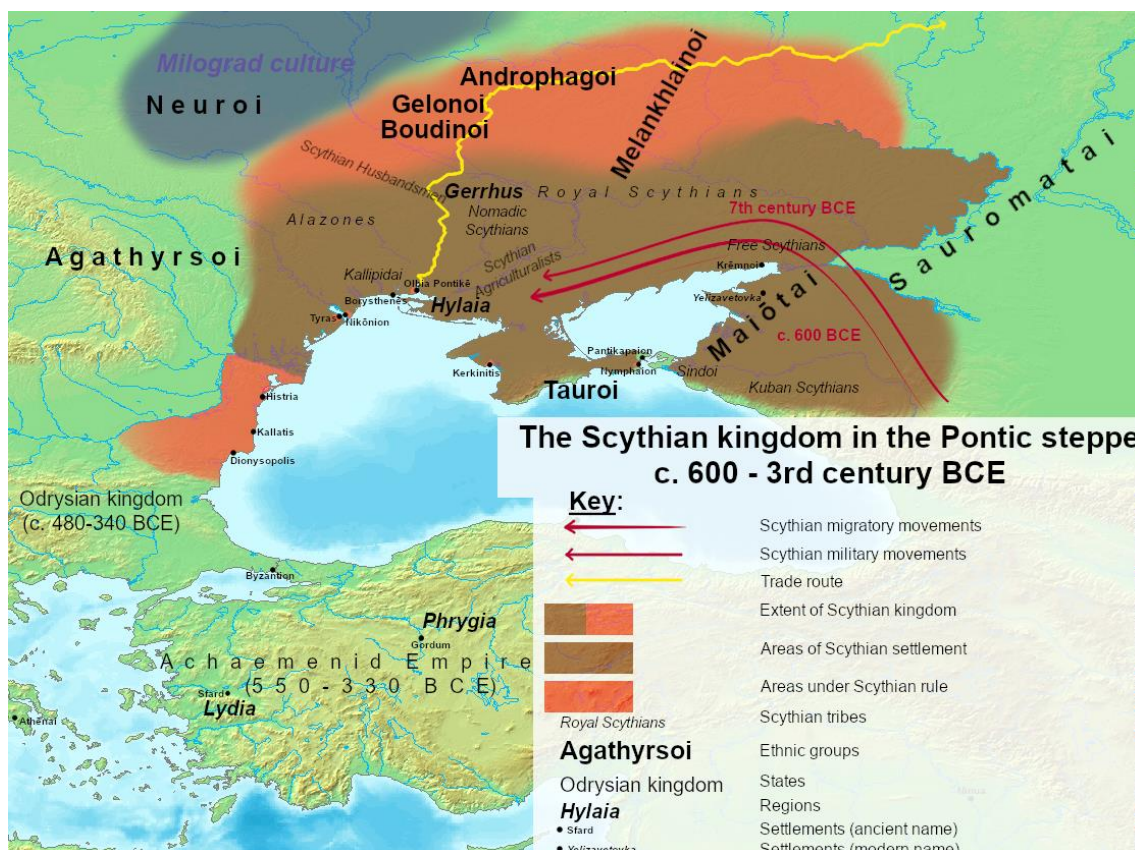
私たちは去年の二月に起こった、ロシアのウクライナに対する侵略をどう見ればよいでしょうか？この世界大戦の亡霊がよみがえったとみるべきです。ロシアは、昔の世界戦争を陰謀論の中でよみがえらせました。それは、ナチスと私たちは戦っているのだという、ないものがあるもののようにして戦っています。ウクライナはナチス政権であり、そのナチスを支援しているのが NATO であり、最大の支援国はアメリカであるという見方です。冷戦時代の米露の対立がよみがえり、一つ間違えば核戦争にもなりかねない状態です。まさに、「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり」るような状態です。

そしてもう一つ、注目してほしいことがあります。エゼキエル戦争の預言です。38 章には、「メシエクトトバルの大首長である、マゴグの地のゴグ」と出てきます。このゴグが、イスラエルに対して、ペルシアやベテ・トガルマ、ゴメルなどと共に攻めてきます。聖書預言と中東情勢に関心のある人には、良く聞いている話ですね。そのゴグの「マゴグの地」とは何か？について、イエス様が地上におられた時と同時代に生きていた歴史家ヨセフスは、スキタイ人であると言っていました。騎馬民族で、黒海やカスピ海の地域に住んでいた遊牧民です。エゼキエルの生きていた時、紀元前 6 世紀の時、スキタイ人が分布していたのは、まさに今のウクライナとその周辺です。ロシアからウクライナに及ぶ地域です。

そして、そのロシアの侵略を支えているのは、対外的にはイランです。イラン製のドローンによって、ウクライナの変電所が破壊され、多くの国民が停電を強いられているのです。そのイランも、「ペルシア」として、ここに登場します。

そしてイエス様は、「地震があり、飢饉も起こる」と言われていますね。ルカによる福音書には、

「疫病」も加えて列挙しておられます(21:11)。新型コロナは現在進行形ですが、少し前は SARS もありましたね。



しかし、大事なのは、「これらのことは産みの苦しみの始まりです」というところなのです。世においては、これら産みの苦しみの始まりにしか過ぎない事柄に、ほとんどの注目を寄せます。コロナ禍のこともそうです。ウクライナでの戦争もそうです。そして、日本では統一協会のことが騒がれていますが、これらのことは確かに起こるけれども、私たちにとって、そこが最も注目しなければいけないことではないのです。

2B 迫害と宣教 9-13

9 あなたがたは用心していなさい。人々はあなたがたを地方法院に引き渡します。あなたがたは、会堂で打ちたたかれ、わたしのために、総督たちや王たちの前に立たされます。そのようにして彼らに証しするのです。10 まず福音が、すべての民族に宣べ伝えられなければなりません。11 人々があなたがたを捕らえて引き渡すとき、何を話そうかと、前もって心配するのはやめなさい。ただ、そのときあなたがたに与えられることを話さなさい。話すのはあなたがたではなく、聖霊です。

キリストの弟子が、もっとも注目しなければいけないことは、福音が、すべての民族に宣べ伝えられていくということなのです。使徒たちは、復活のイエス様にとって、「主よ、イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」と尋ねました(使徒 1:6)。それは、主がよみが

えらえたので、ローマによる支配を潰し、イスラエルのための国を立ち直らせてくださるのではと期待したのです。しかし主は、聖霊によって力が臨む約束をされました。聖霊のバプテスマの約束をされたのです。そして、地の果てに至るまで、この方の証しをする使命が与えられました。

私たちは、その使命の中にいます。世においては、いろいろなことが起こっていますが、それに振り回されるのではなく、そのような困難の中にあっても、それでも福音を伝えていく備えが必要なのです。そして、その中で聖霊が働いてくださるのです。今年、私たちは、そのことを心に留めたいと思います。福音をいかに、語っていくか？ということに心を留めます。コロナ禍のことはあるでしょう。物価高のことはあるでしょう。これから、いろいろな騒ぎが起こってきます。けれども、使徒たちは、コロナや物価高どころか、地方法院に引き渡されたのです。また総督や王たちの前に立たされたのです。しかし、そのように拘束されても、その中で証しを立てていきました。

今、教会にとっての最も大きな危機は、福音ではないところに気が逸らされていることです。私たちは、ウクライナにいるカルバリーチャペルの人々の働きに献金をしました。彼らは、今、ウクライナ全土に福音を広める働きを積極的に進めています。たった今、戦時中であるのにも関わらず、そうした働きができるのです。しかし、今、悪魔の欺き、惑わしがあります。同じように、韓国の教会は、日本が統治している時も、また朝鮮戦争の時でさえ、礼拝を欠かしたことがありませんでした。コロナ禍になってから、対面の礼拝をやめたのです。コロナ禍には、教会にとっての本質を疎かにする、悪魔の惑わしがあります。交わりを希薄にさせ、キリスト者がそれぞれ疎遠になり、その間に信仰が試されている人々が多くなります。また自分たちのことだけ、周囲のことだけ、また自国のことだけに留まり、内向きになり、福音宣教のことを考えていないことです。

しかし、戦争も疫病も、それらは産みの苦しみの始まりにしかすぎません。私たちは第一にすべきことを第一にします。そうすれば、聖霊が臨んでくださいます。イエスを主として生きていく中で、福音の中に生きていく中で、必ずや聖霊の力によって私たちは証しを立てることができます。今年、聖霊に触れられることを願ってください。これまでは、自分の力や知恵の中で、何かやりくりしていたかもしれませんが、しかし、自分のすべてを、弱さもすべて含めて、聖霊に明け渡してください。この方のバプテスマを受けてください。満たされてください。互いに聖霊の賜物を用いることで、どうか心の深いところで、魂に癒やしが与えられますように。主に叫び求めますように。どうせ同じだ、と思わないように。一歩、前に進んで、聖霊の取り扱いを受けることを切に願います。

12 また、兄弟は兄弟を、父は子を死に渡し、子どもたちは両親に逆らって立ち、死に至らせます。

私たちは、今の時代が「分断の時代」と呼んでよいと思います。一人ひとりが、世における騒動によって、その不安から、強い意見を持つようになっていきます。これこそが正しい意見だ、いや真実だと主張して、対立するようになっていきます。陰謀論が入り込むと、分裂が起こっているところが

数多くあります。反ワクチン情報が入り込んで、家族の中で深刻な対立が起こっているというニュースも数多くありますね。

そして、キリストの証しを立てる時に、人々の心にある分断の罪が大きく現れます。私たちにとって最も大きな挑戦は家族への証しです。なぜなら、世の中が悪くなっても、周りとの関係が悪くなっても、最後に頼れるのは何といても、家族だからです。しかし、その結びつき、避難所のような存在が、キリストのゆえに揺らぎます。イエス様は、ご自身が来たのは、平和のためでなく、剣をもたすためであると言われました。家族が、イエスを受け入れないので、自分たちに対して敵対するからです。

私たちは事実、世界各地でキリストのゆえに家族から殺されているという話を数多く聞きます。正統派ユダヤ教徒でも、イスラム教でも、家族の中にキリスト信仰を持つ者が現れたら、葬式をするのです。その子はもう死んでしまったとみなすのです。そして北朝鮮では、家族の中にキリスト者がいれば連帯責任で罰せられるので、家族が内部告発するのです。

13 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。

いろいろな困難がありますが、キリスト者に対しては、イエスを信じているという理由だけで、すべての人から憎まれていくという時代が来ます。キリスト者がキリスト者として生きていくのに、苦しくなっていく時代です。キリストとその福音を憎んでいるからです。

世界各地では、キリスト者だというだけで法的に罰せられる国々があります。また、社会的な制裁を受ける国々があります。日本は、法的にも社会的にも守られていますが、基本、宗教は要らないとして、敵対的であります。キリスト教は特に、必要ないと見なしています。

今、統一協会のことで、宗教二世の被害ということで法整備していますが、いつ何時、それが悪用されて、私たちの信じていることに立ち入ってくるか分かりません。親が子に虐待をしたという文脈でのことですが、下手をすると、親が子に信仰によって教育ができないようにされます。中国とかは、18歳以下の子に福音を伝えたら、法律違反なのです。信教の自由が、長い歴史の中で血を流す犠牲もあって、それでようやく勝ち得たものだということに無知なのです。たった今の不都合や問題だけを見て、いとも簡単に放棄してしまいます。日本も戦前、治安維持という名の下で、キリストの再臨を信じるのが法で裁かれ、キリストの復活を信じるのが法で裁かれました。

今世紀に入ってから、ポストモダンの時代になっていると言われます。それは、「人によって物事を見る解釈が異なり、その解釈こそが真実なのだ」という考えです。分かりやすくいうと、人は客

観的な事実は存在しないという立場です。人それぞれが、これが真実だとするものが真実なのです。ですから、先に話した分断が起こります。それぞれが真理を持っているのだとするからです。真理が、自分たちの上にあるのではなく、自分たちの内にあるとするからです。

しかしキリスト者の信仰は、まぎれもない歴史的事実にあります。キリストが、私たちの罪のために十字架につけられました。そして三日目によみがえられました。これは事実であり、その事実に対して私たちは信仰を持っています。それゆえに強くなることができるのです。私たちの気持ちや、内的に思っていることを真理としているのではないのです。ですから、このことを宣べ伝えること自体が、受け入れない人たちにとっては、相手の気持ちを傷つけたということで、差別発言であるとされていくのです。この方が、罪人のために死なれるという大きな愛が示されたからこそ、私たちはイエスこそが主であるという告白をします。すると、「そうやって宗教を強制された」「だからキリスト教は排他的なのだ」ということになります。

このように、福音を語るのがますます困難になっています。そこで、語ってはいけないという圧力を感じます。しかし、時がよくとも悪くとも、みことばを宣べ伝えるのです。見てください、「最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」とありますね。最後までなのです。主が、必ず最後まで、私たちの面倒を見てくださいます。ですから、私たちも最後まであきらめてはいけません。忍耐して、主を待ち望むのです。

3B 大患難 14-23

14 『荒らす忌まわしいもの』が、立ってはならない所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。15 屋上にいる人は、家から何かを持ち出そうと、下に降りたり、中に入ったりしてはいけません。16 畑にいる人は、上着を取りに戻ってはいけません。17 それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。18 このことが冬に起こらないように祈りなさい。19 それらの日には、神が創造された被造世界のはじめから今に至るまでなかったような、また、今後も決してないような苦難が起こるからです。

世の終わりを見る時は、必ず、「元々、そもそも、どこから始まったのか？」を思い出す必要があります。神殿が破壊されてから、世の終わりの前兆が始まっているということを忘れてはいけません。読者はよく理解せよ、と呼びかけていますが、マタイによれば、ダニエルの預言を悟るように促しています。そこには、神殿が破壊されましたが、終わりには再建されます。しかし、最後の七年間の半ばに、荒らす忌まわしい者が、いけにえとささげものをやめさせます。その者が聖所の中に入って、自分自身が神であると宣言します。堅い契約を結んでいたユダヤ人たちは、そこで一目散に逃げなさいとイエス様に命じられているのです。そして、イスラエルの残りの民、選ばれた者たちにとって、かつてなかった、これからもないような苦難が起こるのです。

この預言があるからこそ、私たちはイスラエルに注目しなければいけません。世の終わりとは、これまで主が異邦人の間で救いのわざを行われていたところが、それが完成すると、イスラエルをみな救われ、回復させることです。ユダヤ人たちがイエスを拒み、彼らがローマによって世界に散らされて、それで終わりではないのです。主は一度、選ばれた者たちを見捨てられることはありません。必ず救われます。



今、イスラエルでは、この神殿の敷地で驚くようなことが起こっています。今は、岩のドームがあります。イスラム教の敷地です。かつては、もしユダヤ教徒がそこに入り、祈りを献げるようなものなら、騒動が起こって、一人、二人死んでもおかしくありませんでした。私が前回、聖地旅行に行った時は、そんな雰囲気でした。ところが、です。今回の聖地旅行で、右派のユダヤ教徒の人たちが、イスラエルの国境警備隊の警備の下、神殿の敷地内を歩いているのです。神殿が、岩のドームのところに再建されることを願い、祈っています。これを可能にするのが、荒らす忌むべき者であると言っただけでしょう。近づいています。

世の終わりには、キリスト者を人々が憎むだけでなく、選びの民であるユダヤ人を憎むようになります。黙示録には、イスラエルを表す女が竜、悪魔によって呑みつくされそうになっている幻があります。ユダヤ人は、その始まりからファラオに赤ん坊をナイル川に投げ入れよという命令が出たように、人々からの憎しみにあっています。それが終わりの日には極みに達するのです。ユダヤ人は、これまで迫害の歴史を辿って来て、その最たるものはホロコーストでした。決してホロコーストを起こさせないということで、イスラエル国が建てられました。しかし今、世界中で反ユダヤ主義が猛威をふるっています。欧米諸国で、ユダヤ人に対する暴力が急増しています。こともあろうに、キリスト者と名乗る者たちが、キリストのゆえに、ユダヤ人を憎む発言をしています。

20 もし主が、その日数を少なくしてくださらなかったら、一人も救われなんでしょう。しかし、主は、ご自分が選んだ人たちのために、その日数を少なくしてくださいました。21 そのときに、だれかが、『ご覧なさい。ここにキリストがいる』とか、『あそこにいる』とか言っても、信じてはいけません。22 偽キリストたち、偽預言者たちが現れて、できれば選ばれた者たちを惑わそうと、しるしや不思議

を行います。23 あなたがたは、気をつけていなさい。わたしは、すべてのことを前もって話しました。

最後に、選ばれた者たちにも感わしがあります。しるしや不思議をもって感わします。ここにキリスト、あそこにいるとかいう感わしがあります。救いを求めている人には、これはとても辛いことです。ここに救いがある、あそこにあると言われたら、それに飛びつきたくになりますね。私も、異端の教会に訪問していた時に、「再臨のイエスはすでに地上にいる。どこかにいるから、もしかしたらスーツ着ているかもしれない。だから緊張していないといけない。」と言っていました。気をつけないとけないとイエス様は言われます。イエス様が来られる時は、次を見れば分かりますが、天の果てから果てまで、すべての人が見えるような形で来られるのです。

4B 天変地異 24-27

24 しかしその日、これらの苦難に続いて、太陽は暗くなり、月は光を放たなくなり、25 星は天から落ち、天にあるもろもろの力は揺り動かされます。26 そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見ます。27 そのとき、人の子は御使いたちを遣わし、地の果てから天の果てまで、選ばれた者たちを四方から集めます。

主が戻って来られる時には、天変地異が起こります。この地球が今の状態でいられるのは、神ご自身の御手があるからです。少しでも、地球の自転の角度を神が変えられるものなら、個々の天変地異は容易に起こります。多くの人が、自分の息さえ支配できていないのに、神がいないと豪語します。しかし、天も地も揺り動かすことによって、創造主がいることを認めざるを得なくなるのです。それでも、黙示録によれば、獣の国の住民は、心を頑なにしてお、神を冒瀆します。

そして主が戻って来られると、世界中のユダヤ人の人たちが集められます。今も、ユダヤ人が世界から集まっています。これは、前段階の徴です。去年は、95 か国から 7 万人が帰還しました。興味深いのは、コロナ禍によってイスラエルが入国禁止にしても、帰還民だけは許可していたことです。また、ウクライナにおける戦争で、去年はウクライナとロシアからの帰還民が急増しました。たった今、起こっていることが、終わりの徴をますます明らかにしているのです。

5B 来臨の徴 28-31

28 いちじくの木から教訓を学びなさい。枝が柔らかくなって葉が出て来ると、夏が近いことが分かります。29 同じように、これらのことが起こるのを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい。

今、説明しましたように、イエス様が語られたことが、私たちの周りでも少しずつ見ていっています。であるならば、いちじくの木に葉が出てきているように、主の来られるのが近いということです。

30 まことに、あなたがたに言います。これらのことがすべて起こるまでは、この時代が過ぎ去ることは決してありません。31 天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。

「この時代」というのは、世代と訳したほうが分かりやすいです。つまり、イエス様の時代に生きていたユダヤ人の世代は、決して過ぎ去ることはないということです。イエス様を受けいれて、救われるという実を結ぶ時まで、この人たちは必ず過ぎ去ることはないということです。これだけの迫害を受けて来たのに、ユダヤ人は健在で、国まで創り、ノーベル賞など、世界的な影響まで与えています。これこそが、イエス様のことばの力です。人間の知恵や力では、到底、彼らが生きて、最後には救われることは考えられません。ユダヤ人が過ぎ去ることなく、このように残っているのですが、主のことばは、天地が過ぎ去っても過ぎ去らないのです。主のことばに頼る者は幸いです。

3A 分からない「その日、その時」 32-37

32 ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。父だけが知っておられます。33 気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたは知らないからです。

ここから、イエス様の警告が、がらっと変わります。とても矛盾しているかのような発言をされています。これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に來たのを知りなさいと言われているのに、ここでは、「だれも知りません」とあります。ここでイエス様は、ご自身が來られるのに、全く前触れもなく來られるということと、いろいろな徴をともなって來られるということをどちらも語っておられますが、新約聖書を眺めると、イエス様が來られるのに二段階があることが見えてきます。一つは、天から空中まで來られて、死んだキリスト者が生き返り、生きている者たちも引き上げられる携挙です。もう一つは、天から、栄光の姿に変えられた教会と共に降りて來られて、地上に戻られるイエス様の再臨です。前者は何の前触れもなく、いつ來るかもわかりません。後者は、徴が伴ってその最終の時に來られます。

34 それはちょうど、旅に出る人のようです。家を離れるとき、しもべたちそれぞれに、仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているように命じます。35 ですから、目を覚ましていなさい。家の主人がいつ帰って來るのか、夕方なのか、夜中なのか、鶏の鳴くころなのか、明け方なのか、分からないからです。36 主人が突然帰って來て、あなたがたが眠っているのを見ることがないようにいなさい。37 わたしがあなたがたに言っていることは、すべての人に言っているのです。目を覚ましていなさい。」

これが、最後のイエス様の警告です。目を覚ましていることです。目を覚ましているとは、主の見

ているように、自分自身が見えていることです。また、主の見てるように、周りの人々のことが見えていて、この世界が見えていることです。それは、祈りとみことば、また交わりを保っている中で、御霊がおられるので、見えてくることです。眠っていると、誘惑に陥ります。主がいつ来てもよいように、私たちは用意していきましょう。